

# 清末小説から 107

2012.10.1

- 商務印書館の名称と日中合弁問題 1 ..... 樽本照雄 1  
《劍光蝶影》の原作..... 渡辺浩司 9  
张声和略考 傅兰雅“时新小说”征文参赛作者考(三) ..... 姚 达兑 15  
清末小説から 14 18

『清末小説』第35号は現在印刷中です。お手元にはもうすぐ。目次は、14頁をご覧ください

清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 8 番4-202 樽本照雄方

## 商務印書館の名称と日中合弁問題 1

樽 本 照 雄

商務印書館と金港堂の合弁問題を論じる文章に中村忠行「検証：商務印書館・金港堂の合弁」1-3（『清末小説』第12、13、16号 1989.12.1、1990.12.1、1993.12.1）がある。

中村忠行（1915-1993）は、日本文学の方向から日中比較文学研究を進めて著名

だ。商務印書館と金港堂の合弁についても、日中文化交流のひとつとして取り上げている。その研究は、残念ながら1993年の死去によって中断した。

本稿は、中村論文、主として『清末小説』第12号掲載のものを紹介しながら、商務印書館の名称を検討し考える。その背景に日中合弁問題が存在しており、複雑だ。

## 日中合弁後の商務印書館という名称

合弁会社とは、いうまでもなく複数の企業が共同出資し特定の事業を営むことをいう。その際、普通は会社名を新しくする。すこし古いが、日本のソニーとスウェーデンのエリクソンのばあいがある。両社は携帯電話事業に特化して、合弁会社ソニー・エリクソン・モバイルコミュニケーションズを設立した。

1903年の日中合弁会社も事情は同じだ。商務印書館と金港堂だから商務印書館金港堂とか、また商金書局とか、あるいはまったく別の商号、屋号、名称、呼称にしてもよかった。だが、そうならなかった。従来通りの商務印書館を継承した。これが問題を発生させることになった。

商務印書館と金港堂のばあい、最初の出資金は平等である。双方が10万元を出資する。合計20万元の資本金となる。金港堂側からは社主原亮三郎が出資する。金港堂は原の個人会社のようなものだ。ゆえに、この10万元という出資が金港堂という会社組織か、原個人によるものか、と区別することはできない。とにかく日本側が10万元を出した。合弁の初期において、日中双方から同数の理事を選出しているのは、出資率に応じたものだと理解できる。両者が同等の権利を有する。一方に優先的権利を付与するものではない。社長は夏瑞芳である。商務印書館といえば、創立から経営を取り仕切っていたのが夏瑞芳だ。その意味で夏と原は同じような立場にあったといえる。夏瑞芳も原亮三郎もひとことではワンマン社長だった。

商務印書館の資本は、1901年の第1次増資で額面上は5万元になっている。これは合弁以前のことで、1903年の正式合弁にあたり残りの5万元を現金で用意する。全額が納められるのにほぼ1年かかった。商務印書館側の資本については、そう説明されており問題はなさそうだ。だが、細かく見ていけば疑問は残る。商務印書館が所有する資産などをどう算定

したのか、詳細が不明である。今にいたるまで、合弁契約書は公開されていない。関連書類が現在の商務印書館にはすでに紛失しているのか、あるいは秘して出さないのか、それすらもわからない。なぜそのように書くのか。先例があるからだ。

高翰卿「本館創業史 在発行所学生訓練班的演講」(『(1897-1992) 商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1)である。創業当時の状況を比較的詳細に説明している。当事者の証言だからこそ貴重だ。1934年に商務印書館内部で行なわれた講演らしい。そこには日本の金港堂と合弁した経緯も述べられている。以前、私が日中合弁について調べていたとき、北京の商務印書館に直接問い合わせたことがある。関連資料が保存されていないだろうか、と。返答があり、日本軍が上海を攻撃したさいにすべて失われてしまった、という意味のことが書いてあった。しかたがない。独自に調査を進めた。数年後、失われた資料であるはずの上記高翰卿の文章が公表された。私は、驚いたものだ。私があれこれ資料を集めて知った事実とほとんど同じ証言を高翰卿がはるか以前に行っていたのである。つまり、1934年の講演原稿(あるいは内部刊行物に掲載された\*1)がながく商務印書館内部に保存されていた。それが、ほぼ60年後に公表されたということになる。その間、内部資料として関係者だけが閲覧していたのだろう。ところが、商務印書館の外部において(つまり日本で)日中合弁のおおよそが明らかにされたから、高翰卿の講演原稿は解禁され

たと理解できないこともない\*2。

さて日中合併にかかわる商務印書館の名称問題だ。

合併会社になったにもかかわらず商務印書館という旧称を変更しないまま引き継いだ。これが、いろいろな臆測を生む原因になっている。

商務印書館大事記では、「日本資本を吸収した〔吸収日資〕」と今でも説明している。あたかも吸収合併したように受け取れるではないか。ここには、金港堂を吸収合併したと短絡させたい、つまり、商務印書館の相対的優位をうたいたい、との姿勢が現われている。しかし、金港堂は日本に存続しているから、吸収はありえない。ならば、金港堂からの単なる投資だろうか。一部分ならばいざしらず、資本の半分を外国側から受け入れているのだ。それで投資しただけ、ということではできない。だいいち長尾雨山ら日本人を編訳所に迎えて刊行物を共同で編集している事実がある。両社是对等の立場で合併会社となった、という事実を確認しておく。

金港堂は日本にそのまま存続しているからいい。問題があるのは、上海の商務印書館の方だ。光緒二十九年十月初一日(1903.11.19)に日本の会社と合併したあとも、前述のとおりそのまま商務印書館と称した。商務印書館有限公司となった、と商務印書館大事記などでは説明している。だが、正確に言えば、有限公司となったのは1901年の第1次増資の時だった。普通は「有限公司」をつけないで呼ぶ。また、刊行物に記名して商務印書館のま

まだ。

ところが、ここに奇妙な事実がある。商務印書館ばかりではなく、上海商務印書館、中国商務印書館という表記が併存する。

中村が指摘するのは、それらの名称が曖昧なままに使用されている事実だ。この3者が存在しているところに着目して、その背後には金港堂と商務印書館の文化摩擦があったからだと推測する。あるいは、その逆で、両者に摩擦があることを異なる名称に根拠を求めた。これが、中村説の基本だ。

商務印書館の名称について考える前に、商務印書館が別に「商務書館」と表記していることを説明しておきたい。中村説によれば、これも日本人が関係しており、その意味で同根になる。

#### 商務書館のこと

中村は、小説専門雑誌『繡像小説』の創刊と停刊に、あるいはその編集に金港堂社主原亮三郎が深くかかわっていると考える。李伯元が西村天囚を介して原亮三郎に紹介されたであろうともいう\*3。

日本人が『繡像小説』に関係しているひとつの証拠として中村があげるのが、「中国商務書館」という表示だ。「印」が抜けて、ただの「書館」になっている。

その《繡像小説》も、第三十一期(推定光緒三十一年三月十五日刊)以降終刊までの柱記が、繡像の部分を除いて、凡て<中國商務印書館印行>に改まつてある。正確には、第三十

二期以下の柱記がさうなつてゐるので第三十一期の柱記は<中國商務書館>である。<中西女學堂に中西先生を訪ね、書館を圖書館か書肆と心得る赤毛布>とは、口さがない上海つ子が、日本渡來の新參者を嘲つた言葉だが、正にその愚を演じてゐるのである。ここでも、金港堂の意圖したところが、<新しい合辦會社の設立>であり、それを前提とする原の投資であつたこと、又社名變更の問題に安易に妥協してしまつたことへの後悔が、まざまざと窺へる。(注ルビ省略)第12号107頁

日中の合弁会社を設立したとき、社長を夏瑞芳に譲るかわりに、合弁会社の名称をたとえば金港堂書局にしてもよかつた。中村はそう考えているらしい。そうならなかつたから「社名變更の問題に安易に妥協してしまつたことへの後悔」ということばになつた。あくまでも推測の域を出ない。私が考えるに、名称を變更することなど夏瑞芳には受け入れることはできなかつたろう。なんのために苦心慘愴して経営を維持してきたのか。張元濟、印錫璋らからの増資を得て経営建て直しに奮闘の最中であつた。印錫璋を通じて日本の三井洋行上海支店長山本条太郎に資金援助を申し入れたとしても、商務印書館を改称するなど考えたこともなかつたろう。その結果が、改称なしの合弁会社設立だ。

さて、「中国商務書館」である。中村が説明しているのは、日本人には中国語

の「書館」という意味が理解できていないということだ。日本人は「書館」を図書館か書店だと考えるが、実は中国では寄席のこと。つまり、『繡像小説』の柱に「中国商務書館」と「印」抜きに表示するのは日本人だから犯した誤りだといいたいのである。もうひとつ、商務印書館に「中国」を冠するのは、原が金港堂を暗示させるための意図的な行為だという。

中村の説明には不確定要素が多い。確かに西村天囚には、李伯元を含む中国人たちとの交流があつた。原亮三郎が小説雑誌の創刊を商務印書館に勧めたかもしれない。だが、そうであつたという証言は今のところ見つからない。さらにいえば、雑誌『繡像小説』の運営に関与していたかどうかはまったく不明なのだ。不明だからこそ中国人が間違はずがない「商務書館」という表示に中村は注目したのだろう。中国人であれば「商務書館」とは書かないはずだ。すなわち、日本人の原亮三郎が深く関与していたからこそその表記になつた、と。中村による仮説だ。

私が反論する。

ひとつは「中国商務書館」と見えるのは『繡像小説』第31期だけだ。原亮三郎の強い意思があるのならば、なぜ全72冊に及んでいないのか。その理由を説明できない。

ふたつに、「印」抜きの「商務書館」は、それ以外にも普通に見ることができる。たとえば、商務印書館の看板刊行物のひとつである英漢字典だ。その書名は、

『商務書館華英音韻字典集成』『商務書館華英字典』となっている。「印」抜きであることは明らかだ。

この「印」抜き商務書館の字典については、中村は広告を検討して言及している。『清末小説』第13号91頁から引用する(商務書館に傍点があるのは省略。注も略)。

だが、広告の冒頭に《商務書館華英音韻字典集成》・《商務書館華英字典》などとあるのは、何と解釋したらよいか。書名は、《普魯士地方自治行政説》巻末の廣告は勿論、《繡像小説》創刊號巻末の新書廣告でも、《教育界》三卷七號(明治三十七年四月、1904)にみられる金港堂の廣告(商務印書館の日本總代理店の挨拶廣告)などでも、凡てさうなつてゐるから、誤植ではない。これは、何と解すべきか。

覽するまでもなく、<書館>は講釋の寄席を設けてある茶館、轉じて俗語では<私塾>、隱語では<遊廓>の意となる。先聖の國の君子が、この様な文字を書名に冠する筈がない。明らかに、中國を知らぬ日本人の仕業であり、書物も東京で印刷されたものに違ひない。蓋し、廣告には《華英字典》に注して、<洋紙洋裝一元>・<洋連史紙五角>とある。<龍章>の工場は既に稼働してゐるから、洋紙の供給には事闕かぬとしても、洋裝(精裝、平裝)の技術は、未だ發達してはゐまい。勿論、書店

名を刊本に冠する慣習もない。忖度すれば、從來印刷所として知られて來た商務印書館が、今、新しく書店として轉生するのであるから、大いに名を賣って置く必要があると打算したのが、この愚行を演ずる結果となつたのであらう。

中村は、「商務書館」と表示したのはあくまでも日本人の仕業だと考えた。「隱語では<遊廓>の意となる」ことばを自社の出版物に使用するはずがないではないか。そう指摘して一貫している。「商務書館」について、「先聖の國の君子が、この様な文字を書名に冠する筈がない。明らかに、中國を知らぬ日本人の仕業であり、書物も東京で印刷されたものに違ひない」と断言してしまつた。

中村の説明は、残念ながら広告に見える書名にもとづいた推測にすぎない。ありえない名称だと思いこんだ。だから実物が存在することなど想像できなかったのだらう。

しかし、原物の字典を見れば明らかに「商務書館」なのである。該書裏扉には「光緒壬寅三次重印」と見える。1902年のことだ。発行元は「上海/商務印書館」である(写真1、2)。

印刷したのは失火前の自社印刷所においてだ。日本東京ではない。北京路の商務印書館は、美華書館の西側にあった。商務印書館自身が編集印刷する字典であることにご注目いただきたい。「印」がないからといってこれらの字典に日本人が參画していたということにはならない。

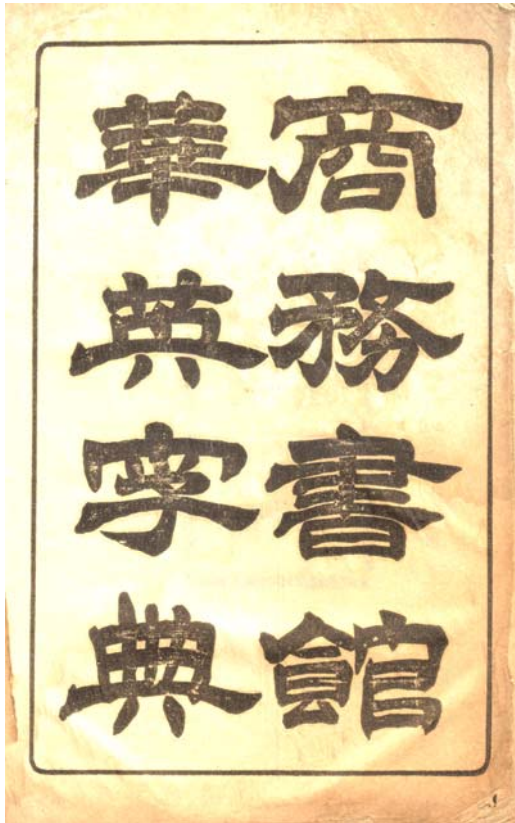
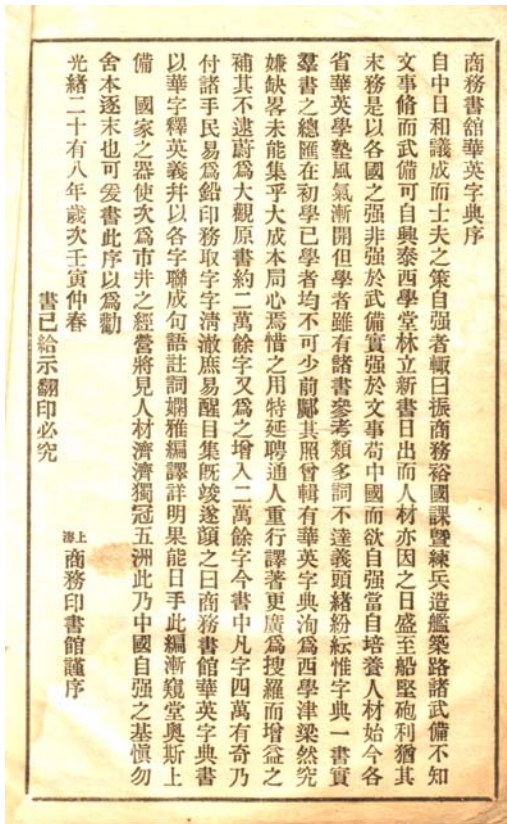


写真1

写真2



商務印書館 = 金港堂説

中村が商務印書館の名称に注目したのは、『清末小説』に論文を連載する以前のことだった。前出中村「『繡像小説』と金港堂主・原亮三郎」（1986。注3参照）において、以下のように述べている。

「上海商務印書館」・「中国商務印書館」とは、実は商務印書館と合併した我が金港堂の別名に他ならないのではないかと。544頁

商務印書館と金港堂との意見の対立は、その他の面でも色々あつたらしい。両者の商慣習が異り、合併といふことにも習熟してゐなかつたのが、その原因であらう。調印後、半年余りを経て、再び問題が起つた。時期から考へて、期末決算に絡むものであることは、想像に難くない。業を煮やした原（亮三郎）は、それまで専ら用ゐてゐた「上海商務印書館」と併行して、新会社に、「中国商務印書館」の名を用ゐた。外国資本が導入されてゐる事実を一般に知られることは、商務印書館の最も忌み嫌ふところであつたから、夏瑞芳や張元済には、極めて不愉快な行動であつたに違ひない。553頁

中村によれば、原亮三郎は商務印書館との合併にあたって会社名を変更しなかつたことを悔やんでいた（ここは中村の仮説）。商務印書館は、日本資本と合併したことを社会に知られたくなかつた（こ

れは事実)。その強い姿勢を原は受け入れざるを得なかった(仮説)。名称は商務印書館のままにした(事実)。自らの弱腰を後悔して、ことあるごとに名称をいじくり、金港堂の存在を暗示しようとした(仮説)。それが商務書館であり、上海商務印書館であり、中国商務印書館だった(これらの表記があるのは事実)。複数の名称が出てきたのは、いずれも金港堂側の思惑が原因であった。そういう筋書きである。

考察を続けた中村は、さらに加えて商務印書館までも金港堂の化身にした。商務印書館も金港堂ということになれば、合併会社なのだから別にかまわないようにも思える。しかし、中村がいいたいのは、商務印書館と称して内容は金港堂なのだ。理解するのに骨がおれる。ますます複雑化するのだ。

商務印書館が小説本の訳者に使われるのは、これが買い取り原稿であったことを暗示するという。そこまでは、なるほどそうかと思う。

注目されるのは、商務印書館が合併を前提とする金港堂の匿名である、と書いた箇所だ。合併前から金港堂は中国で書籍の刊行を行っていたことになる。

ひとつの根拠は、『明治法制史』の奥付にある。

ひとこと説明しておけば、失火後の印刷所と総発行所は、場所が分かれている。印刷所は銭業会館西文昌閣隔壁に新築し、総発行所は棋盤街中市に置いたのだった。

さて、『明治法制史』の奥付だ。刊年、原著人、訳者、校者と示して次が印刷者、

住所付の発行者および総発行所の上海商務印書館となる。中村があげるのは、その住所付発行者が「上海鉄馬路橋北銭業会館西文昌閣隔壁 発行者 商務印書館」となっている箇所が問題だという。

これをもとにして「発行者は<商務印書館>を稱してはゐるが、舊來の<商務印書館>ではないことを、それとなく匂はせてゐるのである。端的に言へば、この印刷所は、<金港堂>が上海に開設した印刷所であり、<金港堂>の上海支店でもあつた」(第12号98頁)となる。

印刷所の住所であるはずのところに商務印書館の表示がかぶさっている。すなわち、金港堂上海支店を兼ねていたという主張だ。印刷所が金港堂上海支店で、しかも商務印書館と称したという。

くりかえす。1902年に商務印書館は失火で発行所兼印刷所を失った。上海鉄馬路橋北銭業会館西文昌閣隔壁(また北福建路海寧路、美界北穿虹浜路:写真3)に3階レンガ建ての印刷所を新築したのは、失火後の二ヵ月が経ったかたためうちのことだ。

『寒桃記』の裏表紙に印刷所の写真が掲載されている(写真4)。夏のころに撮影されたか。すべての窓に日よけが開いている。堂々とした建築物であることがわかる。従来は絵図でのみ知られていた。その意味でこの写真は珍しい。上海商務印書館印刷所とある。英文表示は、Commercial Press Type Foundry, SHANGHAIだ。Type Foundryとは、活字鑄造所を意味する。英文表示を手がかりにすれば、上海にある商務印書館印刷所ということ



写真3:『繡像小説』裏表紙



写真4:商務印書館印刷所

になる。ここの上海商務印書館は、しいて表記すれば所在地を併記する上海・商

務印書館である。

当時、上海で刊行された英文会社録にも商務印書館印刷所が掲載されている\*4。上の写真に添えられた英文「Commercial Press Type Foundry」と同じ表示がある。所在地は「2, North Fukien Road 北福建路2号」だ。北福建路第二号と書いても同じになる。

中村説を確認しておきたい。この新築成った印刷所は「商務印書館」と称する中身は金港堂のことだという。

中村説を検討する。

氏が証拠とするのは、気がつかないほどに小さな部分だ。印刷所の住所であるはずのところに発行者商務印書館の名前が配置されている。すなわち、上海鉄馬路橋北錢業會館西文昌閣隔壁が印刷所ではなく、発行者商務印書館の住所にされている例が1件だけある。『明治法制史』の奥付だ。指摘されなければ、わからない。



【注】

- 1) 中村は、次のように書いている。「文中に見える高鳳池の言葉は、《同舟》 商務印書館の企業誌であらう 第二巻第十期に原載された <本館創業史> から抜かれたものであらう」 第12号100頁。この指摘は当たっていた。
- 2) 沢本郁馬「鍵としての高翰卿「本館創業史」」 『清末小説』第15号1992.12.1
- 3) 中村忠行「『繡像小説』と金港堂主・原亮三郎」 『神田喜一郎博士追悼中国学論集』二玄社1986.12.15。548頁
- 4) THE DESK HONG LIST; A GENERAL AND BUSINESS DIRECTORY FOR SHANGHAI AND THE NORTHERN AND RIVER PORTS, 1904, (SHANGHAI: The Office of the "North-China Herald." 1904 / 電字版)、20頁



《劍光蝶影》の原作

渡辺浩司

1

《小説月報》第七卷第五号(商務印書館, 1916年5月25日 - 東豊書店1979年10月影印《小説月報 自創刊號起至廿二卷十二期止》を使用, 発行年月日は『清末民初小説目録第4版』(樽本照雄編, 2011年3月31日)による, 以下同)に、《劍光蝶影》なる短篇作品が掲載された。書名下には“汝鼎 無爲”とあるだけで、創作のように見える。『清末民初小説目録 第4版』も創作と見なしている(J0425)。しかし、この作品は実は翻訳なのである。その原作等が判明したので本稿で報告する。

原作名は『The Ranker』、原作者は Frank E. Verney、掲載誌は『The Strand Magazine』 Vol.48-No.284(George Newnes, 1914年8月)である。

Frank Edwin Verney は、英国の作家兼ジャーナリスト、1884年生、卒年不明、名前の前に「Major」(少佐)をつける辞典項目もあり、軍人でもあったらしい。

訳者“汝鼎”は未詳。小説月報誌 8-12 (1917.12.25)に《新弭兵家》を発表した王

汝鼎がいるが、同作にしか名前が見えず、同一人物かどうか不明。

“無爲”には前掲『清末民初小説目録第4版』によると、顧無爲と王無爲がいる。顧無爲は、作品を見ると劇作家のようなので、王無爲であろう。王無爲は、本名を王新命、原籍は福建福州、生卒年不明、作家やジャーナリストとして活躍した。

2

『The Ranker』のあらすじを述べる。

帰営の音楽が奏される中、Taylor は連隊長の宿舎に入った。入口には連隊長の娘がおり、彼を呼び止め、ここで答を待っている等と告げた。それに答えた後、執事に案内され、連隊長と会見した。非公式の訪問は初めてだった。彼は、連隊長の娘の Helen が昨晚自分と結婚すると言ってくれた、と打ち明け、連隊長に同意を求めた。しかし、連隊長は不可能だ等と答えた。彼が、自分が家柄からではなく、兵卒上がりの下士官だから許してもらえないのか等と尋ねた所、連隊長は、彼の能力を認めた上で、娘の夫に求めるのは言葉では言い尽くせないものだ等と述べた。更に、士官は個人の出世を犠牲にし、自らの連隊に留まる、という不文律があることを話し、Taylor が幕僚養成大学に入ることを非難した。娘の幸福をそのために犠牲にするのか等と反論する彼に対し、連隊長は、娘が君にひかれるのはわかるが、娘の民主主義的で近代的な考え方は認められないだろう等と言ひ、話を打ち切ろうとした。そこに、

THE RANKER.



"AND YOU LET A BROTHER OFFICER SHOULDER YOUR BLAME?"

Helen が入って来て、二人の話を聞いたと言ひ、父(連隊長)に向かい Taylor 以外の誰とも結婚しないと涙ながらに話した。この結婚は無理なことがわかるだろう等と言う父に、彼女はきっぱりと、父が許してくれなくても結婚すると話した。すると、父は机上の娘の写真を伏せて、そんなことをすれば親子の縁を切ると厳しく言った。

## II\*1

その夜の士官の食事会で、Taylor は愛する家族から追放されたかのように、ショックを受けて呆然と座っていた。だが、Helen を思い出し、我に返った。食事の最後に、代表が副代表の Taylor に呼びかけた。彼が起立しグラスを持ち上げると、列席者全員が彼に習った。彼は「紳士諸君、国王に！」と声高に言い、皆も「国王に！ 神の御加護を！」と応じ、祝杯を飲んだ。その後、喫煙しようとした別の隊の士官に、彼は、もう一度祝杯が

あるから、と止めた。そして、連隊長が起立しグラスを持ち上げると、やはり列席者全員が彼に習った。「紳士諸君、連隊に！」と祝杯を挙げた。喫煙を止められた士官は彼にこの祝杯の習慣の起源を尋ね、彼は、連隊の創設時からで、当時は「家族に！」という言葉だったと答えた。Taylor はその席上、Helen の弟の Nevil Finch-Skye が民間人に挟まれて座っているのを見た。彼らは賭けトランプの仲間だった。連隊の共同休憩室では賭け金が低額に定められているので、そうではないゲームは士官の部屋で行なわれていた。Nevil の部屋は父(連隊長)と同棟内にあるので、彼が賭けトランプをする時には、大抵は Taylor が自分の部屋を貸しており、その日も貸す約束をしていた。彼は Nevil に声をかけられ、それを思い出した。連隊長が退席し、皆は共同休憩室に移った。訪問客がいる晩には、礼儀として下士官全員が残るように求められているのだが、Taylor は初めてそれに従わず、外出し近隣を 2 時間歩いた。

Taylor が自分の部屋に戻ると、三人の男がトランプをしており、Nevil の所には札と金貨の山があった。突然、一人(民間人の Ramsden)が立ち上がり Nevil に待てと言ひ、枚数の合わないカードを指し、いかさまを非難した。彼が第六連隊の名前を出すと、Nevil も立ち上がった。Nevil が話す前に、Taylor がテーブルに歩み寄り、このトランプは自分のものだと言った。驚く Ramsden に Taylor は落ち着いて、Nevil が勝っていたのは偶然だ等と話した。もう一人(民間人)が

Ramsden に向かい、Nevil に謝罪するよう促し、彼はそれに従った。その後、彼は Taylor を非難し、Taylor は淡々とお金を元通りに三人に分けた。Ramsden は再び Nevil と連隊に謝罪し、Nevil は何かつぶやいていた。二人の民間人は無言で部屋を去った。Nevil は突然、ドアへ駆け出したが、Taylor が止めた。Taylor は、Nevil のためではなく、連隊のためであり、今の出来事を真実とするのを誓うよう言った。Nevil が破産寸前だった等と話していると、副官からの使いが来て、Nevil を呼び出した。10 分後、Taylor の親友である副官の Edwards が現れ、彼から剣を取り上げ、連隊長の所へ出頭を求めた。

### III

今でも信じられないと前置きしながら、連隊長は Taylor に、トランプでの不正の告発を受けた、Nevil からも証言を取った等と話した。彼は釈明せずに認めたので、連隊長は除隊届を出すよう命じた。その時、Helen と Nevil が部屋に入ってきた。Nevil は連隊長に歩み寄り、不正を行なったのは自分で、Taylor ではない、と申し出た。今になってなぜだ、と問う連隊長に対し、Nevil は、Helen の幸福のためと答えた。そこで、連隊長が Taylor に、Helen のために Nevil の罪をかぶろうとしたのかと尋ねると、彼は、連隊のためと答えた。連隊長は彼を称えた後、Nevil に向かい、皆の前ですべてを告白し除隊するよう命じた。止めようとした彼に対し、連隊長が止められないと言いかけた時、副官と二人の民間人(一人は

Ramsden)が入室して来た。連隊長はちょうどいい時に来た等と言い、Nevil を促すと、彼は Ramsden に、あのトランプは自分のもので、Taylor のではない、と話した。すると、Ramsden は、今晚はどこかおかしな所があった等と言い、Taylor に謝罪した。Ramsden は、我々以外の誰も今晚のことを知らなければ、すべて無かったことにしましょう、と言った。連隊長は動かなかったが、副官は連隊長を見て、連隊のため等と嘆願した。Helen がすすり泣きを始めると、連隊長は彼女を Taylor の方へやさしく押しやり、Taylor に向かって、娘を君に任せることを誇りに思う等と話した。そして、連隊長は厳しい表情で、全員に対し、我が連隊を代表して諸君に感謝する、とだけ話した。

恋仲の若い男女とその結婚に反対する女性の父がいる。そこに事件が起こり、男が中心となり解決する。それを理由に女性の父が二人の結婚を認める。拙稿で取り上げたことのある、Headon Hill 『Seaward for the Foe』の「How the 'Vengeur' Came to Bournemouth」及び「The Troopship and the 'Destroyer」でも見られた物語パターンである(「林訳小説《紅篋記》などの原作(上)」 - 『清末小説』32(清末小説研究会,2009.12.1)掲載)。伝統と格式を重んずる軍隊の様子が少しうかがえ、そんな隊にもバカ息子がいるという人間らしさもうかがえ、面白い物語である。原作発表が 1914 年 8 月なので、作品の執筆はその少し前になるのである

う。ヨーロッパに戦争突入の気運が高まる中で書いたにしては、それほど緊張感のある深刻な内容ではないので、1914年8月に本作を読んだ一般読者は、逆に安心したであろう(その安心は数か月で崩れるのであるが)。

3

中国語訳について述べる。他に訳されていた場合の原作探求の手掛かりになると思うので、主な固有名詞の対照表を掲げる。

原作	中国語訳
Gerry Taylor	古雷 太勒
Finch-Skye	芬司苟
Helen	海倫
Nevil	奈維 or 奈維

書名について、原作は主人公 Taylor の出身を表す「The Ranker」(兵卒上がりの将校)とする。中国語訳は“劍光蝶影”とする。“劍光”は表に立つ兵士の象徴であり、“蝶影”は後ろで見守る女性を表している。歴史を持つ軍隊の中では家柄が重んじられるという原作の前提に、民国期の読者はなじまないと考えた訳者が、物語の男女関係の方を取り上げて訳したように思える。原作も中国語訳も、書名を一目見ただけでは、その内容はわからなかったであろう。

内容について、物語通りにきちんと訳していると思う。士官の食事会の場面や台詞を話す時の表情の描写に省略が見られる。

慣用表現を誤解した個所を挙げる。トランプで Nevil のいかさまがばれた場面である。

Finch-Skye stared at the accusing red visage above him and suddenly round at the others, his glance coming to rest on the red-jacketed figure of the brother officer.

Taylor looked the Colonel's son in the eyes, and that which he saw there brought him to his feet.

“My God!”he exclaimed, in a whisper.

And then Taylor saw something else which was visible to him only.

Glaringly white upon the dark blue overalled knees of his brother officer gleamed a card, on which a single red heart blazed like a spot of blood. (128 頁右)

( (Nevil)Finch-Skye は赤くなった告発者の顔をじっと見上げ、そして周囲の者を見た、更に視線は赤いジャケットを着た先輩士官の方に向けられた。

Taylor は連隊長の息子を見た。そこで目にしたもののために、彼は立ち上がった。

「ああ!」彼は小声で叫んだ。

その時、Taylor は彼にしか見えなかったあるものを見た。

後輩士官の濃紺の正装ズボンの上に、まばゆいばかりの白いカードがちらりと見えたのである、その上には血のしみのように赤いハートが一つ輝いていた。)

芬司苟注視其人。既又環視室中一周。不期視線乃與太勒相觸。微聞其祝曰：“上帝臨佑。”當是時太勒實見尚有一物。映發於芬司苟護膝之間。蓋又一愛司也。其中心之心臟形。紅若鮮血。(凡同點牌每副四張。其點色兩紅兩黑。花式中斜方形及心臟形兩種。屬紅色。此處所云之心臟形。即我國俗稱小鷄心者是。)幸見之者僅止太勒。(5頁上-下,句点は原文のまま,コロン・引用符は補った,以下同)

(芬司苟はその男をじっと見て、室内をぐるりと見回した。思わず視線が太勒と合った。(太勒の)「神の御加護を」という祈りが微かに聞こえた。その時、実は太勒は他にあるものを見たのである。それは芬司苟の膝当ての所にきらりと輝いた。もう一枚のエース、真ん中にハートで、鮮血のように赤かった(同じ数字のカードは4枚ずつあり、色は2枚が赤で、2枚が黒、模様は菱形とハートの2種類あり、それが赤である。ここでハートというのは、我が国で俗に小鷄心(小さなニワトリの心臓)と呼んでいるものである)。運が良かったのは、太勒しか見ていなかったことである。)

いかさまと糾弾されたエースの枚数が5枚ではなく、6枚もあったことがわかる場面である。それに気付いた Taylor が、思わず漏らした感嘆の「My God!」を、中国語訳では「上帝臨佑」と直訳しておかしくしている。直後の、周到なランプの加筆説明とは対照的に、訳者のう

っかりミスだと思われる。

大きな加筆のある最後の場面を挙げる。

“Taylor,”he said,“she's all I have now. I am proud to give her to you.”

He turned again to the others, his finely-cut features rigid with repression.

“Gentlemen,”he said, simply,“for my regiment I thank you.”(132頁右)

(「Taylor」彼は言った「娘は今の私が持っているすべてだ。娘を君に預けることを誇りに思うよ。」)

彼は再び他の人々の方を向いた、くっきり整った容貌は固く抑制されていた。

「紳士諸君」彼は短く言った「我が連隊を代表し、諸君に礼を言おう。」)

鄭重言曰：“太勒。老夫今以愛女屬君矣。”復面衆人曰：“我代吾軍敬謝諸君。”衆至茲。集中視線於太勒及海倫。不約而同聲致賀。且祝曰：“上帝將降爾遐福。”(9頁上-下)

(鄭重に言った「太勒、私は今、愛する娘を君に預けよう。」更に皆に向かって「我が連隊を代表し、諸君に礼を言おう。」皆はその時、太勒と海倫に注目した。期せずして一斉にお祝いの声が起こった、「二人に神による祝福あれ。」)

原作はハッピーエンドのように見えるが、この後すぐに連隊は第一次世界大戦に参加したであろう。Taylor は、幕僚養

成大学へ進学せず、Helen との結婚は後回しにして、連隊の一員として出征し、歴史のある勇敢さを示すために最前線の戦いを志願したであろう、そして Finch-Skye 父子と三人とも戦死したかも知れない。そう考えると、中国語訳の、幸せを強調した加筆は、やはり不必要に思える。

4

わかりやすい物語で、かつ舞台が軍隊内で、大戦中という時局にも合致し、更に Strand 誌同号のトップを飾る作品ということで、早い時期に中国語に訳され、小説月報誌に掲載されたのであろう。現在はあまり知られておらず\*2、1916 年当時も翻訳とは明記されず、漢字にすらしてもらえなかった原作者 Frank E. Verney を知らしめただけでも本稿の価値はあると思う。 罍

【注】

- 1) 冒頭に「I」の表記は無い。
- 2) Frank E. Verney 作品の日本語訳は見つけられなかった。

【参考文献・ホームページ(HP)】

陳玉堂編著《中国近現代人物名号大辞典》浙江古籍出版社,1993年5月

橋川時雄『中國文化界人物總鑑』中華法令編印館,1940年10月25日 名著普及会覆刻版,1982年3月20日,を使用

『Who Was Who among English and European Authors 1931-1949』, Gale Research Company,1978年

『Who Was Who in Literature 1906-1934』, Gale Research Company,1979年

William G.Contento 管理 HP「The Fiction Mags Index」  
<http://www.philsp.com/homeville/FMI/Ostart.htm> (2012年7月9日確認)

『清末小説』第35号

ヘプバーン、マティーア兄弟と美華書館  
 ..... 樽本照雄

Bruno Lessing の中国語訳..... 渡辺浩司

商務印書館『涵芬楼新書分類総目』について ..... 沢本郁馬

民国第一小説 民国第一劇本  
 谈《血泪黄花》..... 郭 长海

徐劍膽考論續篇..... 胡 全章

陈冷血两篇翻译小说的日语底本  
 ..... 张 艳

《卢梭魂》作者考辨..... 宋 庆阳

《刘鹗年谱长编》后记..... 刘 德隆

王志松『小説翻訳与文化建構 以中日比較文学研究為視角』  
 北京・清華大学出版社 2011.9

近代報刊与日本政治小説の伝播 以《清議報》、《新民叢報》為考察対象

文体的選擇与創造 論梁啓超の小説翻訳 文体对晚清翻訳界的影響

析《十五小豪傑》的“豪傑訳” 兼論章回白話小説体与晚清翻訳小説的連載問題

李伯元和《前本経国美談新戯》

## 张声和略考

傅兰雅“时新小说”征文参赛作者考(三)

姚 达 兑

所著《新趣小说》四回(《清末时新小说集》第八册), 参赛未获奖作品。

张声和, 即张恭(1853-1938), 字声和, 号藹如。广东省东莞县牛眠埔村人。

“曾长期任职于香港基督教巴色传道会, 在广东紫金、东莞和香港等地传教。”\*1 刘粤声所编《香港基督教会史》中载有张声和传记。刘志伟编纂有《张声和家族文书》, 内容“主要是张声和牧师在他的乡下东莞牛眠埔村的财产关系文书, 包括置产簿、分家书、田产买卖典当契约和借债文书等。”\*2

### (一)、张声和及其家族

张声和的父亲张廷彩受洗于德国传教士韩士伯(Rev August Hanspach, 德国巴陵会, 即Berlin Missionary Society), 为粤东传教初果。张廷彩曾匿太平天国干王洪仁玕于家中, 后随其进京。事见刘粤声编《香港基督教会史》。“时太平天国建都江南, 粤局扰攘, 洪氏族众, 逊遁四方, 有益谦氏者, 天皇族弟也, 因避法网来牧师故乡, 匿居隐密之永培书室, 牧师之父



刘粤声编《香港基督教会史》(1941)

彩廷, 昕夕亲炙, 民族革命思想, 深镌脑版, 迨益谦氏被诏晋京, 封玕王(临去亲搦“龙凤福禄寿”五大字于粉壁, 迄今犹存), 寻以黄绫额绣‘王窟’二字遥齋其家, 并诏其父赴京赞襄政务, 职户部侍郎封三千岁。”\*3 后来太平天国天京陷落, 张廷彩逃难至杭州, 并死于当地。\*4

张声和的履历简要如下。“太平天国失败后, 张声和避难到了李朗, 进入巴色会开设的教会学校。二十三岁毕业后, 在本地教堂任职五年, 调任香港巴色会主任。三十一岁至四十三岁间仍在紫金和东莞新安一带传教。四十三岁调任香港巴色总会主任教务。到1924年七十一岁时重回故乡定居。”\*5 (案: 1877年, 二十四岁的张声和加入了巴色会。许舒博士即Dr. James Hayes提到了张氏的入会证明。\*6) 张氏四十三岁这一年恰好是1896年, 即为傅兰雅小说征文出案的那一年。张声和参与傅兰雅的小说征文比赛, 对其个人有什么影响, 现今不得而知。但是巧合的是, 在征文比

赛结束后，他调往香港巴色总会，主任其会教务。张声和批判三弊和呼唤基督教拯救中国的想法，应该是多年来深思熟虑的结果。可以推料，这些想法一方面是他与其他的传教士讨论交流后的结果，另一方面也应该是在他平日的布道中，经常涉及的论题。

刘粤声所撰《香港基督教会史》论及了张声和所受的基督教影响，及其个人的品性。“张牧师性耿直刚强，善善恶恶，乐柔远人，喜恤贫乏，擅讲道，简切恳挚，闻者动容，生平笃信守道，尽忠职责，终生不懈，亦以此勉同人。……自云一生灵性修养，得力于《旧约诗篇》，披阅之余，忧苦得慰藉，愚蒙受启迪，黑暗放光明，难题获解决，犹诵《诗篇》念三篇及九十篇‘主为吾人所皈依万古不易兮，耶和華為我牧是以无匱乏兮’之句。”\*7

## (二)、其著《时新小说》

张声和所著《时新小说》四回梗概如下。主人公陈废翁主人公陈废翁养育有二子一女。长子尚古，学为时文；次子尚洋，恶嗜鸦片；两位媳妇及女儿则缠足。因而陈家皆是“废人”，遂以之为号。小说第一回“博古院学士修文，朝鲜国倭人叛约”写尚古以时文而得朝廷重用，被派往平壤平倭。开篇首回便触及了时事，正是傅兰雅征文布告中要求的“述事务取近今易有”。\*8尚古是被时文教育出来的只懂得纸上谈兵的迂腐文人，因而在朝鲜以兵败收场。此时朝廷震怒，惩罚尚古永生不得叙用，并且剿家没产。尚洋虽嗜鸦片，闲时却也爱读《万国公报》等报纸，所以颇识时务。第二回写兄弟俩人相互责骂对

方为废人。尚古归家之后，责骂其弟为废人，只识抽鸦片；尚洋也针锋相对地反击，认为自己抽烟只是伤自己一人，而时文之害更大——“废人废家废国”\*9。第三回转写俩位媳妇互责对方的丈夫无用，一为时文所害，一为鸦片所害，最终两妇又伤叹自己也是受害者，原因在于“缠足”之俗。前三回至此，已充分地攻讦了时文、鸦片和缠足三弊，因而作者在第四回给出了解除三弊的最好办法。第四回写陈废翁去请教一个外国牧师如何祛除三弊，答案是：耶稣教。听到这样的答案后，陈废翁“即携全家到圣堂听道。尚洋即戒烟，入中西书院，学习政事。尚古先生研考圣经，为圣经学士。其女嫁教中一名士。全家入教。废翁换礼名曰‘时新’。”\*10如此祛除三弊之法，使人从“废人”变成“时新”之人，家家如此，则中国富强之期在望。

## (三) 民族主义与基督教

张声和充分地攻击了时文的无用和鸦片的大害，然而时文和鸦片两者在其笔下隐喻性地指向了中学和西学。攻击时文，顺势而至，也攻击中国的传统学问在许多方面既是错谬百出，又是毫无时用。如对中国传统地理学的攻击，张声和写道：“夫地理不详细，乃关乎国计民生者，徒知本朝堂堂大国，其余都是细小一隅。他国之地广人稠，英才绝顶，绝不深悉，岂不深危哉。如日本乃是邻邦，只谓蕞尔三小岛，何能有为。然其国中兴盛人才精明，懵然不觉。知彼之道，安在哉？”\*11现代的地理知识，一方面是国家知己知彼的战略需要，另一方面也是中国在从传统转型



至现代，进入民族国家时代的过程中必要的知识性的认同。

尚古满腹经纶，然则时文毫无时用，临阵之时却变成了纸上谈兵。“旧岁倭奴侵我藩属，尚古先生须髯倒竖，即上奏一篇，讲得义理条条畅畅，声罪致讨，战有必胜之道。……奉旨调往平壤击敌。进兵之日，旌旗蔽空，炮声震地，皆祝曰：将军原来是个星宿降凡，今读书有年，为国家出征平寇，胸藏韬略，腹有良机，率数万仁义之师，兵到之日，倭奴必当稽首来降，指日清平矣。”\*12作者明显嘲讽了时文和中国传统文人的迂腐无用，为下文中方惨败作出了解说的理由，即传统学问已不堪应付当代的实际用途了。在这后面的篇节中，尚洋回应了尚古的激烈批评。尚洋批评尚古如是，“及后为国出征，说出许多大话，到底逃于平壤，败于摩天，旅顺、威海天险之地，唾手交倭。鸭绿江、刘公岛更负朝廷之托，以致台湾东南保障，皆为无有，然则前破倭人之胆者，安在？用笔一挥而足者，安在？更所夸本大臣有七纵七擒之策者，又安在哉？此岂非俾八股文章，塞了心窍。”\*13废翁听了两个儿子的相互攻讦后深感悲痛，后又私下召其大儿子尚古，当面劝解。尚古作为“时文”的局中人，当时也是深有反思，回应其父如是，“儿今回为国效力，非兵力战船亚于日本，想起又是专习时文、未曾彻底练习兵法之过，到用时方知迟误。……观今回与倭人交锋，亦间有学西法熟手者，亦请有西人助手者，但彼不能操权，终是八股先生执政。”\*14在此处，父子三人感触于民族主义情绪，都将议论聚焦于中日战争，将解弊之道，指向于学习西方知识。

西学固然是好，日本学之，可胜清廷。那么，西学中最根本学问的又是什么？什么才是中国最应该学习的呢？就这个问题，废翁请教了传教牧师。牧师答曰：“此次天朝大国，见败于日本小邦，岂因兵甲不利、战船不坚，兵士不众乎？……即学就西人之法，而不能学得西人之心，亦不过皮毛工夫，非久远之策。今日本骤兴，勿谓已得西人之心，为久安长治之谋也。盖不以**天来之道**，以植其基，亦不过如插瓶之花，挂树之果耳，岂终可恃乎？……**天来之道**无他，即我所传之**耶稣教**也。此乃亘古之第一妙法，舍此别无救路。”\*15由此而知，这篇小说的主旨正合乎傅兰雅征文要求，尤其是以“基督教腔调”写成，为中国开出的药方是：以基督教祛除三弊、拯救中国。 囧

（“时新小说”作者考系列未完待续）

（中山大学中文系博士生，哈佛燕京学社访问研究员）

附录一：《张声和墓碑志》（存目）

[刘志伟编：《张声和家族文书》，香港：华南研究出版社，1999年，第156页。下图见于该书160页。向刘老师谨致谢忱。]



照片五：張聲和墓，位於牛眠埔村後的山坡上

附录二：《张声和牧师》（存目）  
 [刘粤声编：《香港基督教会史》，香港：  
 基督教联合会，1941年，第278-281页。]

上海：上海古籍出版社，2011年，第473-  
 474页。

【注】

- 1) 刘志伟编纂：《张声和家族文书》，香港：  
 华南研究出版社，1999年，前言，页xii。
- 2) 刘志伟编纂：《张声和家族文书》，香港：  
 华南研究出版社，1999年，前言，页xii。
- 3) 刘粤声编：《香港基督教会史》，香港：基  
 基督教联合会，1941年，第278-281页。此书  
 1996年由香港浸信教会重版，见重版第340-  
 344页。
- 4) 刘志伟编纂：《张声和家族文书》，香港：  
 华南研究出版社，1999年，前言，页ix。
- 5) 刘志伟编纂：《张声和家族文书》，香港：  
 华南研究出版社，1999年，前言，页xiii。
- 6) 刘志伟编纂：《张声和家族文书》，香港：  
 华南研究出版社，1999年，何舒博士序言，  
 页ii。
- 7) 刘粤声编：《香港基督教会史》，香港：基  
 基督教联合会，1941年，第280-281页。
- 8) (美)戴吉礼(Dagenais, F.)主编：《傅  
 兰雅档案》第二卷，桂林：广西师范大学出  
 版社，2010年，第501页。
- 9) 周欣平主编：《清末时新小说集》第八册，  
 上海：上海古籍出版社，2011年，第432页。
- 10) 周欣平主编：《清末时新小说集》第八册，  
 上海：上海古籍出版社，2011年，第477页。
- 11) 周欣平主编：《清末时新小说集》第八册，  
 上海：上海古籍出版社，2011年，第399页。
- 12) 周欣平主编：《清末时新小说集》第八册，  
 上海：上海古籍出版社，2011年，第404页。
- 13) 周欣平主编：《清末时新小说集》第八册，  
 上海：上海古籍出版社，2011年，第431页。
- 14) 周欣平主编：《清末时新小说集》第八册，  
 上海：上海古籍出版社，2011年，第451-  
 452页。
- 15) 周欣平主编：《清末时新小说集》第八册，

清末小説から

- 伍 紅玉 『童話背後の歴史 西方童話与  
 中国社会(1900-1937)』台湾・  
 学生書局2010.11
- 李 艷麗 晚清俄国小説訳介路徑及底本考  
 兼析“虚無党小説” 『外国文学  
 評論』2011年1期2011.2 電字版
- 張 天星 『報刊与晚清文学現代化的發生』  
 南京・鳳凰出版伝媒集团、鳳凰出版  
 社2011.7
- 鄭文惠、顏健富主編 『革命・啓蒙・抒情  
 中国近現代文学与文化研究学思  
 録』台湾・允晨文化実業股份有限公  
 司2011.9
- 胡 全章 『清末民初白話報刊研究』北京・  
 中国社会科学出版社2011.12
- 韓 洪拳 『浙江近現代小説史』杭州出版社  
 2011.12
- 黄 錦珠 晚清女作家小説中の婚恋觀 以  
 《女獄花》、《姊妹花》、《俠義佳  
 人》為例 『東亞觀念史集刊』第1  
 期 台湾2011.12
- 習 斌 『晚清稀見小説経眼録』上海世紀  
 出版股份有限公司遠東出版社2012.3
- 宋 莉華 19世紀伝教士漢語方言小説述略  
 『文学遺産』2012年第4期  
 2012.7.15
- 劉 進才 【書評】評胡全章著《清末民初  
 白話報刊研究》 『中国現代文学研  
 究叢刊』2012年第7期(總第156期)  
 2012.7.15